

第五回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第五回「文芸思潮」現代詩賞

第五回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで、今年は全国および海外から一千名を超える一三〇七名のご応募をいただき、いっそう充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

応募作の中から、まず選考委員会予選担当による第一次予選、第二次予選の選考が行なわれました。それを通過した作品を対象に、五十嵐勉、池田康の各選考委員により、第三次選考、さらに最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

なお、今回も昨年以上に応募数が多かったことから、引き続き「佳作」を設け、すぐれた作品をより広く顕彰することにいたしました。

奨励賞および佳作の作品の中にも多くの方に読んでいただきたい作品がありますので、それらの作品も、できるだけ「文芸思潮」ウェブおよびインターネット誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

現代詩賞の授賞式は、銀華文学賞、エッセイ賞と併せて、明年一月三十一日午後二時より大田区民プラザにて行なう予定です。受賞者以外の方も受け付けておりますので、お誘いの上ぜひ御参集ください。

第六回「文芸思潮」現代詩賞は、明年二〇一〇年も今年とほぼ同じ要領で募集を行います（ただし第六回より応募料を千円御負担していただき賞金などを上げさせていただくことになりましたのでご了承ください）。締め切りは五月三十一日です。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

当選

カツチャ
「母ア」「遠工^{ドコ}処で」「息子よ」

福地順一（北海道札幌市）

「冷凍人間ノ夢」「Heartless city」

「真昼の散策」 北埜ユリコ（大阪府堺市）

優秀賞

「耳塚」「伝書鳩」 二条千河（北海道札幌市）

「香ばしい人々は食べられる言葉で会話する」

ゆきすところふ（埼玉県志木市）

「ノット・ア・ライン」「Be」「にがつき」

木糸ゆさ（東京都杉並区）

「肖像 甥・絢音の誕生日に」

中島真悠子（千葉県鎌ヶ谷市）

「人間鳥コンテスト」「半紙」「鉄火巻リズム」

福田ゆかり（大阪府茨木市）

「母が舞う」「呼ぶ声」「すみにすむすみ」

江口久路（京都府京都市）

奨励賞

「至正」「明け方」「mark.」 エン（大阪府寝屋川市）

「不安な夢のように不安な風景に」「星に愛を語るように」「死

が幻影に影を見るように」 佐山広平（愛知県春日井市）

「潜む星と錠剤と祈」「君へ」「eri」櫻尾雪（東京都大田区）

「両目が見た世界は彼がいるつもりだけど私はここで待っている」 蒼ノ下雷太郎（埼玉県さいたま市）

「Gaza Yee」「熱い汁」「大洪水」伊藤伸太郎（千葉県松戸市）

「箱」「月球儀」「しぬということ」後藤若菜（千葉県市川市）

「森I」「森II」 井本元義（福岡県福岡市）

「死に刃向かう」「死に伍する」「死に屍つらう」

谷口誠司（福岡県北九州市）

「100年先のブルトンに」「火の鳥」「銀河は撓み」

星 子龍（東京都大田区）

「黒存在」 清家 侑（栃木県真岡市）

「男と女、女と男」「記憶の少年」「詩人の日常」

小野絵里華（東京都世田谷区）

「史上初の渦」「焼印」「巢籠もりギプス」

みなみなみ（新潟県新潟市）

「キアゲハが羽化した日」「水中の風景」「めだか」

小林瑞枝（神奈川県横浜浜市）

「時間を祝して白は笑う」「オーダーメイドの私たち」

「治療」 井上美帆（埼玉県所沢市）

「深海魚」「こよみ」「ストロベリームーン」

Kanwu（東京都板橋区）

選評

都市と風土の詩性



五十嵐 勉

今回応募数はさらに増えて、一三〇〇を超えた。現代の日本に、詩という表現を通して何かを言いたい、叫びたいエネルギーが渦巻いていることを推量する。日本語を使って生きていく人々の精神の感情の根は、腐ってはいないことを喜ぶたい。

応募者も二十代、十代の若年層が増えていることも活気を帯びさせている。昨年よりも十代の作品に優れているものが多かった。中学生、高校生でも、レベルの高い詩が増えた。

奨励賞、優秀賞レベルの詩は豊作で、どれを落とすか、どれに泣いてもらうかに苦勞するくらい多くのよい詩が集まったが、去年と同じ傾向で、ダントツに優れているという際立った詩は、残念ながらなかった。

そんななかで、当選作・北埜ユリコ氏の「冷凍人間ノ夢」[Heartless city]は、詩に込められた思いに力があつた。詩の表現法は生硬で、凡庸なまじりも残るが、言葉を重ねていくうちに不思議なパワーが宿り、だんだん大きくなって、広大な空間にひろがる、スケールの大きさにつながっていくところに叫びの強さを感じた。長詩を書ける才能がある。この長詩は、ただたんに長いというだけでなく、しだいに大きく深く高くパワーアップされていく展開力を備えてはじめて創られ得るもので、日本の名作のレベルでもこれを実現している詩はそうはない。もともと日本には長詩はあまりないと言える。万葉の頃のものは、皇室や土地を礼賛するものが多いので、質が異なる。この才能は希有である。こういう詩を作るには、精神的にきわめて大きなパワーが要求されるので、小さなことにはあまり神経質にならずに、苦しいけれども大事にしてこの貴重な才能を伸ばしていつてほしい。

もう一つの当選作は、福地順一氏の「母ア」「息子よ」である。北埜氏とは対極的にその詩空間は地方であり、詩言語は方言を駆使している。方言には、その土地や、自然や、血や、草木や、人間の独特な絆が根の強い力を持って噴出してくるところに、一つの領域が成立し得るが、福地氏は母との血の絆の回想にこの力を用いて深い愛惜を構築している。この二篇は呼びかけと答えの対をなす詩だが、福地氏がそれをはっきり意識して二篇を作ったかは疑問で、明確な対になっていないのは惜しまれる。「息子よ」のほう弱い。「母ア」のほうは方言の音感のなかに、幼児の時間と、母親との肉体的な接触空間が風土の空気や匂いととも蘇り、濃密な母性時空を立ち上がらせてくるところに、詩の構築がある。母性への回想を自己の生の回想に重ねてその意味を希求する動機が、深い存在への抱擁となつて、風土と生とを包み込んでくる。方言によって回帰を実現した。

優秀賞の二条千河氏「耳塚」は、情報過多、安っぽい善意や感傷や規則などの情報押し付けられる現代の空気の犠牲を秀吉の時代の耳塚になぞらえて反抗した、詩の発想ならではの造形空間である。二条氏は、三回目の優秀賞受賞だが、現代に目を向けるその角度において、深化している。ゆきすとりふ氏の「香ばしい人々は食べられる言葉で会話する」は、料理の空間に人間関係の匂いをミックスさせながら独特の言語遊泳を見せている。その個性は高い思考にしっかりと裏付けられた高次元領域をなしているが、広がりやややしく、規模に欠ける点で、当選には至らなかった。スケールがやや乏しいところが惜しまれたが、洗練された言葉と、構成力に注目した。

中島真悠子氏の「肖像 甥・綾音の誕生日に」は、甥の誕生の祝詩だが、身近な甥の誕生にこれだけ深く大きな詩象を造形できる力量は、称揚に値する。未来と宇宙とを祝福のうちにひろげる造形と愛情の大きさは、現代ではむしろ肩身の狭い肯定の力を再認識させる。素直さと率直さがなければ、この展開力は生まれえないだろう。

佳作

居場所 嘘つきな痛み 春の日に／母の手作り／馴れ合い 無題／回廊の外された絵画 邂逅の果て／打てば響く早さで、／四つの季節のなかで わたしは 起源をめぐって／虎の巻き返し／夏のエレメント 嫌いな言葉を消す／五十音詩／春めく パレード／コンクリートレリック／錆びた支柱 陸月／壊れた世界／あおいろのねこぎんいろのねこ 或る二トの一日／つばさをください／ECHOー反響する記憶ー	光城健悦 辻本 瞬 あさのたか 灰根子 豊島ケイトウ 浅見龍之介 飛行少年 榊 一威 伊藤佐知子
裏庭 やじろべえ／屋根／100円の 光視症 天道を待ちながら この岸で鹿毛は留まる／親不知子不知磯の細道／雨上 がりの公孫樹 愛飲愛食／懂れの／家の片隅で起こる会話 日常の小窓 母性／ドキュメンタリー 情性／棒／全体主義の海にて溺れゆく我が四体と其の遺言 阿刺吉 神の記憶／違和 流星群／いのちをつなぐこと／廃墟の森	小鮎史子 松田純子 木塚康成 末永 透 葵屋 船越鏡入 長尾めぐみ 猫式純也 関根裕治 山川方子 三井利久
壱岐／愛について／ふゆぞらのひかりのために 雫の記憶 ヒカリトカゲ／唯物の調べ／窓の外の異国 緑／瓦礫／蛙夜唱 とうめい／小さなギセイ 弟／満開の桜が咲く部屋／美しいものを求めて ルート360／4番目の事実無根／ゲシュタルト 時の馭者／逆行運動／行粧世界 メッセージ1／3 触手／パティオにて 花びらの鎖／蒼いひかりの素 送り主／部屋／深呼吸 谷底から満月に向けて／翻訳／夢の花	柴田康弘 加藤尚彦 にしつづら 三色団子 湯浅紫保里 緑野るり P E 鞍牟 目黒裕佳子 功刀垂矢子 小青青史 村山千鳥 渡辺洋一郎

木糸ゆさ氏も若い世代の詩人である。「Be」よりも「ノット・ア・ライオン」や「にがつき」のほうが、表現の奔放さが生きていて、造形の跳躍力が発揮されている。むしろ形を破壊していくような強い力動性を感じられるので、この方向をもっと展開していくと、一つの可能性が切り開かれるかもしれない。

福田ゆかり氏の「人間鳥コンテスト」は、発想のユニークな諧謔性がおもしろい。詩による風刺漫画を見せられているようで、ユーモラスなパンチ力にノック・ダウンされた。詩の高尚な四コマ漫画が書ける人だと思つた。現代の倒錯的な世界はこういう風刺でしか切り取れない不可解さに満ちている。現代を切り取るのに、きわめて有効な表現を有している。さらに徹底した強烈な風刺で現代を飛翔してほしい。

優秀賞で一人だけ男性で年配の江口久路氏は、「母が舞う」という詩作品のリアリティに迫真性があった。表現の甘い点もあったが、母の霊としての存在に冒瀆的な解剖を加えながら、物理性の奥に到達しようとする希

求に、母性の空白を埋めようとする不毛な回帰性がある。ちょうど当選作の「母ア」の逆である。

奨励賞は、それぞれ個性のある作品が揃ったが、谷口誠司氏の「死に刃向かう」の連作は、死と自分の生を見つめ、それと格闘する激しさが感じられて印象に残った。

また佳作のなかには三色団子というペンネームで三人で合作した作品があり、それなりに詩として成立していて、こういう作り方もあり得ることを再認識させられた。

今回、佳作に中学生・高校生が三人入賞したが、そのレベルは高いもので、このまま続けていけば、何かになりそうな気配もある。才能の開花を期待したい。

ただし、詩は持続が必ずしも果実に結びつくとは限らない。才能が努力や人生を裏切ることもある。詩への魅惑が生活や未来を犠牲にすることも少なくない。言葉と刃を交え、真剣で切り結ぶ者は、自らも刃に傷つき、倒れる覚悟も持たなければならぬ。詩を創造するパワーは、博徒の勝利の喜びにつながる。天国か地獄かの純粋な喜びが、足下に虹の橋を架けてくれる。

死によるかけがえのない一回性こそが生の秘密なら、そこに架かる虹の橋の上に浮かぶことは至福の一瞬だろう。

人間の根源的な場所



池田 康

今年は何んとか当選が出たのでよかった。まずその二人の作品について。

福地順一さんは、方言の強みで作品をまとめた。津軽方言だという。歌

でに普遍的な表現に到達している、そのイメージ力の非凡さに感嘆する。中島さんの作品は、去年のものもそうだったが、繰り返し読むたびに気づかされるものがあり、独自の奥行きを備えているようである。

二条千河さんの二作は、「伝書鳩」は輪郭くつきりでの人らしく好ましいけれど詩の内容が（非常に面白いのだが）どことなく特殊で、ストライクゾーンに入ってきたながら外れていく妙な変化球のようであり、受け取り方、消化の仕方がやっかいか。「耳塚」は、重い内容だけれど、すこし表現に濁りがあるのか、この人特有のクリスタルクリアな明澄さに欠けている点が惜しまれる。作風を知っているがゆえの違和感。力瘤を入れようとするとどこかどう入れるかは、表現全般に及ぶ難しい問題だが、鉛筆を握り締めすぎるとかえって結果が出ないということは誰しも経験するところである。

ゆきすとりふさんの「香ばしい人々は食べられる言葉で会話する」は、一読、言葉がなめらかに遊戯性たっぷりに流れるからかえって、なに

い流すのではなく、非常に緊密に組み立てていて、土地の血をにじませて人間の心情が立ち上がってくる。「母ア」も素直な心の表出が魅力的だが、「遠工処で」がすばらしい。ごく短い詩だが、今回のコンクールの大収穫という感じがする。人間の根源的な寂しき、悲しき、というところがありきたりだが、そうとでも言うしかないものが鮮やかに表現されていて、シンプルで根源的であればあるほどそれだけ深くこちらの平常心に突き刺さってくるのである。「誰だが／遠工遠工処で泣えでだネ」は奇跡的な二行といふほかない。

北埜ユリコさんの作品、「Heartless city」「真昼の散策」はどこかとりとめがなく、焦点が絞られきれていない感じがするが、「冷凍人間ノ夢」は迫力がありフォルム感の強さがある。矜持が立ち上がっているのを感じる。かなり長い詩だが、ただ長いというのではなく、自分が存在するこの全世界のありようの本質を捉えてやろうという形而上詩の趣があり、しかし高踏的ではなくあくまで自分に馴染んだ言葉の組み立てで遂行しようとしているから、伝わるものがあるのだろう。イメージがありきたりながれる部分も表現が鍛えてあるから、他の人がこのような詩を書く場合よくあるように散漫にはならない。

優秀賞の江口久路さんは、これも母親のことを書いた詩「母が舞う」がすこみがある。幽霊として出た「狂った母」を幻視しているのだが、赤ん坊の「私」を抱き、その「私」は「木乃伊」であり、「微笑する母／目には光なく／白く濁って／すべての世界を拒絶し受胎する」と続き、踊り狂う「母」宇宙創生の渦巻く羊水の哀れさと恐ろしさ——「成仏」という平安なる言葉をあてがうことのできない、それを阻害する錯綜した心情の絆を歌い出していて、強い印象を受ける。他の二作「呼ぶ声」「すみにすむすみ」もそれぞれ妖しきさを出し、作品として高水準のものにまともっており、安定した力量がうかがわれる。

中島真悠子さんの「肖像 甥・絢音の誕生日に」はこの人の想像力の神妙さ、世界観の深さを感じさせる作品となっている。二十歳を過ぎたばかりというのにこの静かな成熟の度合いはただごとではない。甥の絢音（あやと）と自分を重ね合わせたり離したりしながら踊るように世界を展開させ、絢音を歌っているのか人間そのものを歌っているのかわからないままか空虚と戯れるようなニヒリスティックな感じを受け、選考では消極的な意見を述べたが、受賞の言葉を読むときわめて特異な意図をもって作品を構想しているようで、その珍妙な構想と出来上がったものが作り出す虚構の空間を興味深く感じた。頭脳の働きの意外性できわだつ人。

福田ゆかりさんの三作は、詩を楽しみながら作っていることがよくわかり、言葉遊びに満ちた愉快な作品。作品を作るにあたって自分の姿勢がしっかりしているということは、独自の作品論をもっているということであり、創造者としての存在感と頼もしきを感じる。

木糸ゆきさんの作品「Be」ほか三作は、なにか切実に歌いたいこと、詩の核があるのを感じられる。ただ表面的なレトリック、言語配置上の工夫に腐心しすぎているきらいがあり、そこでかえって読者に見透かされてしまうことにもなりそうで、てこでも動かないような詩行をもっと強く求めることが必要のような気もした。

奨励賞では、蒼ノ下雷太郎さんの「両目が見た世界は彼がいるつもりだけど私はここで待っている」は、言葉数が多すぎるところ、芝居気がありすぎて鼻につくところもあるが、三作品が有機的につながり、幻想と錯覚の非常に不思議なイメージ空間を作り出して、めざましかった。このような創作意図の濃厚な、柄の大きさを感ぜさせる作品の試みを今後も続けてほしい。

選 評

選考委員紹介

五十嵐 勉

いがらし つとむ
1949年山梨県生れ
早稲田大学文学部文芸科卒業
「流瀆の島」で第2回群像新人長編小説賞受賞
「東南アジア通信」「アジアウェーブ」編集長
「緑の手紙」でインターネット文芸新人賞最優秀賞
「鉄の光」で健友館文学賞受賞
現在「文芸思潮」編集長
「詩誌『帰郷者』の栄光と悲劇」を連載中

池田 康

いけだやすし
1964年愛知県生れ
名古屋大学大学院文学研究科修了
詩集「ロマンツェ」1994 詩集「星を狩る夜の道」2005
詩集「星を狩る夜の道」で文芸思潮現代詩人賞受賞
詩と音楽のための「洪水」（洪水企画）を編集発行
<http://www.kozui.net/>



選考会風景
左より、五十嵐、池田。右端はオブザーバーでご参加の渡辺みえこさん（詩人、H氏賞選考委員）

冷凍人間ノ夢

カラダハ 海洋ニ 溶ケコンデ
ココロハ 重力ヲ 断チキツテ
ソウ ハルカナ昔
高速回転シテイル 時空カラ
ボクノ眠ル寝台ハ 隔離シタ

永遠 旅 明ルイ星

不安ヤ哀シミハ過去ノ藻屑トナツテ
銀ノカプセルヲ穩ヤカニ満タスモノ

希望 闇 仄カナ命

父サン母サンアナタノ許ヘハドレ位
運命ヲ歪メサセレバ辿リツケルノカ

未ダ 脳 抱ク覚醒

モウ一度 緑ノ芝 踏ミシメテ
柔ラカナ 陽射シ 身ニアビテ

争イ絶エヌ世界ヲ 脱ケ出シ

痛ミモ震エモ涙モ 果テタ今

カラダハ 浸ル 死ノ香ルスウブニ
ココロハ 蠢ク 生ヲ封ジタ缶詰デ

大切ダッタ ボクノ

名前ハ年齢ハ性別ハ生年月日ハ血液型ハ出身地ハ住所ハ肩書キハ趣味ヤ特技ハ眼ノ色ハ
薄ッペラナ 金属片

サヨウナラ

駆ケ抜ケタ 遠イ影

太陽モ月光モ灯火モ水辺モ木立モ金色モ土煙モ春ノ朝モ夏ノ真昼モ秋ノ夕ベモ冬ノ夜モ
イツマデモ 忘レヌ

深海 音 昔ノ記憶

いつか真夜中の台所で見た
白い 冷蔵庫が
低く長い響きを発していた

空腹のあまり 扉を開けると

そこにはなぜか スウプの素と蓋の開いた缶詰
そして 血汐にまみれた胎児があつて

本当は ボクは浴室に行くべきだった
気がつくと手に 掴んだスプーンとフォークで
口内を汚染し 胃に欲を詰め

ロ ロロロ . . . と泣いていた

ロロロロロロロロロロロ

ココ ココロ

ロロロロココロロロココロ

ロココロロロ . . . と冷蔵庫が鳴いた

北椋ユリコ

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
当選



きたの ゆりこ

1986年生まれ 大阪芸術大学美術学科卒業後、図書館でのアルバイトを細々と行っている。

自称「半ニート」。

好きな詩人は、谷川俊太郎、吉野弘、(歌手→) 椎名林檎、谷山浩子

好きな画家は、ルネ・マグリット、ジョン・エヴァレット・ミレイ、ヴィルヘルム・ハンマースホイ、石田徹也、(絵本作家→) ジミー (幾米)

第6回 文芸思潮 現代詩賞 作品募集

文芸思潮では、清新な詩作品を募集します。志操が荒廃し、言葉の真の力が失われつつある現在、日本語の奥底に流れる感情の根を洗い、美しい言葉として表現の結晶体に高める文芸の営為は、今こそ再興されねばなりません。言葉の芯をなす強靱な詩精神を鍛え、人の心の底に響き、永くそこで生き続ける言魂の作品を期待します。

作品募集要項

主旨●真の言葉の力に溢れた詩作品を賞揚し、詩の創作エネルギーを顕彰する。由来や伝統に根差しつつ、現代に造形する、美しい日本語によって、言語の精神エネルギーの復活をめざす。また埋もれた才能や作品を掘り起こし、広く社会に知らせ、作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルの詩作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人3篇までに限る(3篇の場合まとめて送付のこと/添付別紙は全体に対して1枚のみでよい)。

応募資格●不問

※今回より恐縮ですが応募審査料1000円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

応募規定

一篇は400字詰原稿用紙5枚以内(原稿用紙使用の場合は必ずA4原稿用紙を使用のこと。B4は失格)。今年度より応募審査料1000円を郵便為替などで同封のこと。ワープロ原稿はA4用紙を罫線なしで横に使い40字×30行で印字。必ず閉じること。別紙に①応募部門(2010年度第6回現代詩賞応募作品と明記のこと)②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日(年齢・生年月日のないものは失格とする)⑤〒(郵便番号は必ず明記のこと/ないものは失格)住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらを厳守しない場合は失格とする。⑨応募審査料1000円を郵便為替などで同封。外国からは11USドル。※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと(コピー送付が望ましい)。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」現代詩賞 係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●文芸思潮現代詩賞■賞状・トロフィー・賞金10万円(2名の場合は5万円)

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円

奨励賞■賞状・賞メダル 入選■賞状・記念品

選考委員●池田康・五十嵐勉(他の選考委員が加わることもあり)

締切●2010年5月31日(当日消印有効)

発表●1次予選通過作品は2010年9月末発売の「文芸思潮」37号に発表。

受賞発表・作品掲載は11月末発売の38号、およびインターネットに発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 痛切な心の叫び、天を射抜く鮮烈な言葉、水晶のように輝く言葉の結晶、流麗な音韻の調べ、言魂の響きを期待しています。

解き放て!

青い空へと

眠る幼虫は
その殻の外できらめく闇の向こう
安息の季節を告げる蝶となり
温かな手のひら求め
羽ばたきを終えても
永い月日を照らす花を咲かせ
壊れた戦車の上で命を謳歌しよう

浅緑の意識へ 上昇する

赤い嘘は絶え 真の愛が

子宮を満たす 夢となる

還元サレテ音モ無ク

悪夢ハヤガテ光ニ

果テシノ有ル

ボク ハ 冷凍人間

永遠 旅 夢ヲミル

静寂 死 抱ク生命

重力ニ抱カレ永遠ヲ旅スル

母ア — 七十三の齡、母を偲ぶ —

福地順一

母ア 俺七十三ネなたネ
元氣良ぐしてよ

母ア 俺母アの事、何も覚でねエンだネ
顔コも声コも覚でねエンだ
写真コも見だ事ねエンだ

母ア 母ア、俺三つの時
俺ど離されだんだつてのオ
急性の流行性脳膜炎で
伊東病院の隔離病棟サ入らえだんだつてのオ
その時母ア泣き叫んだべアなア
出して呉へつてよオ
其処ア如何したんだ部屋だべなア
鉄格子嵌てだんだがア

母ア 母ア、俺四つの時
其処で亡くなつたんだつてのオ
誰ネも看取られなくてのオ
その時母ア俺の名前コ呼んだべアなア
一人息子の俺の名前ばよオ

母ア 母アの声、そえでも俺の耳サ残てねエンだネ

何も覚でねエンだ
情ねエ息子だと思てるんでねべがなア
そえでも俺、母アの亡くなつた時の事
何時も氣ネ掛けでるんだネ
この七十過ぎだ今でも氣ネ掛けでるんだネ
あの一年、何んほ切ねがったべアなアと思てるんだネ

母ア 俺七十三ネなた
元氣良ぐしてよ



ふくち じゅんいち

1936年青森県弘前に生まれる。
1959年弘前大学文理学部文学科卒業。
後、東奥義塾高校(弘前)、函館中部高校、札幌南高校、函館東高校、札幌拓北高校など教員生活38年。
1997年定年退職。
後、札幌予備学院講師(漢文)を7年。
元『弘前詩会』『民主文学』『葦牙』『原始林』会員。
現『近代日本文学会』会員。
著書『杜甫・李白・白楽天—その詩と生涯—』(鳥影社)、『風塵記』(日東印刷株式会社)他。

遠工処で

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
当選

田んぼア黄色くなてまで
そろそろ稲刈りだどいう日
如何したんだが俺
他人の田んぼササがど入て行て
学生服ばぶん投げで
稲ば敷布団ネして
大の字ネなて
寝で居だ

顔サ被さた稲の穂の向こうサ
真青だ空展がって居だ

風も何も無工静かアな日であった
心底静かアな日であった

誰だが
遠工遠工処で泣えでだネ

受賞の言葉

福地順一

最優秀賞受賞の由、ありがとうございます。それも、編集部の方から、提出した三編いずれも最優秀賞に値すると言われ驚いております。

若い時に詩を書いたりしてはいましたが、その頃の詩人とされる人たちの詩に観念的独善的な傾向のものが多く(今でもそうですが…)、興味を失ってしまいました。それが昨年の暮れ、どういうわけか急に、津軽弁で詩を書きたくなり、物の怪に取り憑かれたようになって七十編ほどを書きあげました。「母ア」遠工処で」はその中から生まれてきたものです。どちらも事実に基づいて書いたものです。

また一方で、歌謡詩(歌謡歌詞と言ふべきか)も書いておりました。こちらの方は二十編ほどになりました。「息子よ」もその中で生まれたものです。この閉塞感の強い時代にあつて、現代の若者への激励を込めて書いたつもりです。

現代詩とは何かも分からず、ただ、方言詩二編、歌謡詩一編を応募しましたが、それがいずれも現代詩としていい評価をいただいたようで、驚いております。感動です。感謝です。

今、手もとにある詩を編んで一冊の詩集とし、世に問うてみたいと思っております。現代詩賞受賞はそのひとつの契機ともなりました。ありがとうございます。

耳塚

夢と現の狭間に

星中の囁きが反響する

無数のアンテナがサポートする聴覚の

暴力的なまでに高められた感覚は

遙か海の果てに零れたあえかな呻きすら

聞き洩らすことができない

毛布をかぶって固く目を瞑っても

裏腹に耳は次々と言葉を拾ってくる

応える術などありはしないのに

テレビのコードは抜いてある

新聞もラジオもケータイも

まとめて肩籠に放り込んだ

ヘッドフォン・スピーカーで耳を蔽い

闇雲にギターを掻き鳴らしても

締め出せない

見知らぬ誰かの叫びが途絶えることなく

聞こえる 聞こえる

聞こえる

痛みはわたしのものではない

けれど確実にわたしは擦り減っている

耳聴くなればなるほど

わたしたちの心は

鈍らなくてはならないのだ

コメントを求められるなら

脊髄反射で片づけるべきなのだ

考えられるかぎり最小限の犠牲 といって

せいぜい詩が書けなくなる程度のことではないか

それを拒むとしたら

あとはこの耳を切り落とすよりほかにない

巨大な電波塔の下に

そうして耳塚が築かれる

夢と現の狭間に

その幻像は堆く聳え立ち

ついに 自らの呼吸音すら届かない

底なしの静謐に沈む肢体を錯覚する

束の間の安息

葬り去った耳にはただ無言で手を合わせ

ひとまず朝まではこのまま

唄も語りもない世界に

わたしは眠ることにする

貪婪な耳たちは

それでもまだ何かを聞き続けることを欲して

今夜も芳一を

墨黒の闇に誘い込むのか

二条千河

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞



にじょう せんか

北海道札幌市出身。

2005年、詩集『赤壁が燃える日—現代詩「三国志」—』を上梓。

同年よりHP「二条河原の落書」<http://www.h7.dion.ne.jp/~nijo/>にて、作品の公開や創作活動報告を行っている。

受賞の言葉

二条千河

見ざる、言わざる、聞かざる。高名なる賢猿たちに論されるまでもなく、耳目を塞ぎ口を閉ざして生きていけるなら、さぞかし心安らかな暮らしが送れるに違いない。

けれど世に氾濫する言葉は、指の間をこじ開けるようにして身体の中に押し入ってくる。身体の奥に隠してきた言葉を引きずり出し、白日にさらそうとする。いや、何より、聞くこと語ることを自ら渴望する耳や口の食欲を、手のひら二つではとても覆いきれないのだ。猿ほど賢くはない人の定め、と思えば諦めもつくだろうか。

このたび、拙作を優秀賞にご選出いただき、こうして皆さまの御目にかける機会を賜った。自分の口からあふれた言葉が誰かの耳目を汚すことへの恐れ——しかし同時に、一人でも多くの方にご覧いただきたい、ご感想を頂戴したいと思ってしまう欲深さ。猿への進化の道は、なかなか遠いようだ。

マカロニになったのか
僕は一人になったのか

茹であがりのまるい穴
熱いお湯がこぼれおちる

II
バランス感覚

バジルやルッコラ、香菜の類を
レタスやキャベツのように
むしゃむしゃ食べる
この自然を自由に走らせる
人々はこれを罵り
素直になるということはなんて複雑

III
あたしのうどん

秘密をひとつうちあげましょう
ガムを噛んでいるあたし
汗をながしたうどん職人

ぎざぎざの歯のリズム
上顎のまな板に
麺棒の舌は首っつけ
お湯は勝手に沸き上がり
湯あがり蒸気は上機嫌

とってもおいしいのよ

あなたに食べさせてあげられない
涙まじりのあたしのうどん

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

—わたしの酒瓶は近頃隆起する
鳥の奥儀に通じているのだろうか—

I
ラザニアのはずが
マカロニを皿に盛る

時は不思議を纏うから
背後の凝視をねじ伏せる
のらくら者のピラミッド
ぐずぐず頂にとりかかる

東西南北に結婚しよう
前や後は誰にやら預けて
寝る時には愛せずに
いつの朝もひらひらと
(電子レンジの加熱で伸びた、あのだらしのないラップのようにではなく)
のぼして、お湯を沸かす前の
袋になって交わった

熱れた柿の炎は親密に
厚手の鍋肌を滑りゆく
分かち合うのは
くつつ煮えるラザニアで
とると煮える愛だった

夢の続きの塩梅で
素敵な皿に横たわる
僕は思わずむさぼった

茜色の果てに息をのむ
抜け殻の君を見た
メビウス状の僕がいる

香ばしい人々は食べられる言葉で会話する

ゆきすすところふ

パイ生地のなかでとけきれない
ごつごつバターの反骨で
むきだしなまま、困惑させる
お馴染みのあなたの温室のなかなら
難なく馴染んで滑らかになる

一紫苑の明けに
ワインの酔いは顔を出し
今か今かとうちふるえていたのは
グラスの方で
鳥の奥儀に通じていたわたしの酒瓶は
旅立ちの時を迎えていた一

IV
きみのみつ

きみの蜜は
赤まじりの瑪瑙のような黄金色
燻した小枝のような焦げ茶色
その香は
高貴なアールグレイ
快活なアカシア
紙めてしまうには末恐ろしく
唇にそっと、塗りこめる
きみの蜜を
息を殺して秘密にする

休憩

焦げついた神殿のような
餃子の髯を交えてご歓談

V
策略はカプチーノ

ミルクの泡にあたしを抱かせた
あなたのカプチーノ
シナモンは靴音を鳴らし
気ままなフラメンコに夢中
何も知らずに飲み干した
あなたは何も隠せない

VI
しがないカフェ

夕暮れ序曲の石畳
骨抜きビール瓶が転がると
男の立ち襟は寒そうに寄り添う
踏みしだく枯れ葉のおやつを食べて
茶色の暖をとろうとするも
葡萄色が煙るほうへ流される

受賞の言葉

ゆきすとろふ

この度は発表の機会を与えていただきましたこと心より感謝致します。
私は批評（主に美術）に対する素朴な問いを明確にするために詩を書き始め
ました。味わい深い、妙味、といった表現が多用されるのにも関わらず、批評
において「味覚」は口を塞がれるべき劣等生です。タブーの申し子「味覚」を
問うことは不可能なものでしょうか。

その答えを求め私は戯れに2種類の批評モデルを描いてみました。「ミルフ
イーユ型批評」と「シュークリーム型批評」です。それぞれパイ生地とシュー
生地は客観性や歴史に基づく既存の言説を、クリーム部分は作品を満たす味わ
いへの恋心を示すものとし、

前者は幾層にも焼き上がった既存の言説を几帳面に重ね、その間に自らの恋
心をあたかも既にその一部であったかのように塗り込みます。香ばしいパイと
滑らかなクリームの織りなす隙間なく規則正しい調和は、どの部分を切り分け
ても一定の味を保証します。これは皿の上に鎮座し、フォークを持つ手によつ
て断面の美しさと共に賞味されることを前提としており、説得力に富んだ優秀
な学術論文はこれに相当します。

これに対して後者は己の思考に従い無節操に既存の言説を取り込み、膨らん
でいった形そのものを土台にします。内側に不定形のまま詰まった恋心は、手
に取り一口齧ったとたんにこぼれ出す厄介さを孕んでいます。とはいえ、はみ
出たクリームのみを舐めてみると、また別の味覚が官能的に開花するものです。
この賞味の自由度は、シュー皮とクリームの間に残された僅かな隙間にボエジ
ーが潜り込むことによって獲得されるのであり、詩人による頌歌や評論の本質
はこれに他ならないのです。

私はどうにも武骨なシュークリームしか焼けないようなので、その基軸であ
る詩を真剣に書くことにしました。味覚に臆せず、媚びず、じっくり酒を酌み
交わす心づもりで。私にとって詩とは透明でエロティックな美に至る術への驚
嘆を伝える手段なのです。



ゆきすとろふ
1984年1月17日生まれ
2004年9月～2005年10月仏ジャン・ムーランリヨン第3大学留学
2006年3月成蹊大学 文学部 国際文化学科卒業
2009年3月武蔵野美術大学大学院 修士課程 造形研究科 美術専攻
芸術文化政策コース修了
埼玉県在住
平成20年度武蔵野美術大学 大学院 芸術文化政策コース修士論文
「自己神話の向こう側 ジャン・コクトー壁画の詩再考」
現代詩手帖2009年9月号 新人作品
選外佳作「夏の残像たち」

肖像 甥・絢音の誕生日に

中島真悠子

第5回「文芸思潮」
現代詩賞

受賞の言葉

中島真悠子

林檎をかじると
太陽に歯形がつく
小さな吐息が風車をまわす
一方で風は激しく切り裂かれる
蜻蛉を追って草原へかけだす その尾音に
ケルトの地が割れる
あやと

爪先は どこか
宇宙の端つことつながっているとき
無遠慮に鍵盤を叩くたび
洪水を起こしたり そのあと
小さな花を残したりするのを
あなた自身が盲目となり
あなたの中の世界に気がつかないが
あるのだ たしかに
月の寂しい光りぐあいを映した湖に
ゼリーみたいな体を抱えて潜った日々や
あらゆる生き物 あらゆる時間 鉱物に至るまで
ひとつの息づかいで星雲をめぐったこと
ただ 生まれたとき
あまりにも大きな声で叫んでしまったので
いまだ小さなその体を開いても
おもちゃ箱のようにには出てこないのだ
あやと

子どもは無垢な存在にとらえられることが一般的ですが、私には思っていない。子どもなりに打算、計算、嘘もつき、周囲の目の存在を知っているようです。けれどももっと別の次元で、開かれた内部の世界があると思います。目にみえない、広大なその世界も、もとの性質や環境でさまざまでしょう。けれども、はじまりは皆、新鮮で美しい力のはたらくものと思っています。幸い、私の甥はそれなりに恵まれた環境にありますので、肉体的にも精神的にもよい成長をしているようですが、どんな子どもも成長と共に得るものや失うものがあります。白い紙に絵をかけば、それだけ白い域が消えるように。とはいえ、やはり成長することは喜ばしいことです。せめてもの失うものをなにかしらの形で残したいと、人が肖像画を描いたり写真を撮ったりするように、言葉でその世界を描きたいと思い、今回の作品となりました。

私は昔から特に子ども好きというわけではなく、むしろ苦手に感じていました。私より下に兄弟もなかったせい、また甥と叔母という遠すぎず近すぎない血縁関係のせい、彼の存在を思うとき、自分と全く関係ない他人を思うそっけなさ、姉のような母のような気持ちがかすかにするという、おかしいものです。

そんなおかしな感情の発露として、表現したかったものを考えると、どんなものより詩という形式が最も適していたと思います。未熟ではありますが、こうして発表の機会を与えていただけただけに、深く感謝いたします。今回はまことにありがとうございます。

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞



なかしま まゆこ

1987年6月6日生まれ。千葉県出身。
現在、早稲田大学に在学中。
所属同人誌等なし。
第四回文芸思潮現代詩賞 優秀賞

優秀賞

あなたを抱きしめると
地平線からなつかしい季節はやってきて
しかし
私の胸を通りぬけていくばかりだ
あなたはそれを虫捕り網なんかで
軽々とつかまえてみせる
ときどきは
にくいよ
あやと

そのうち
あなたは原始の森や砂漠を忘れ
知らず知らず街をつくりあげるかもしれない
あるときは
あなたの周りの人間が
遠い国や知らない星からやってきたと知り
あなたの街なみは
交遊や略奪のために
せわしなく
窓が作られたり 壊されたりする
群集にキスや石を投げられて
放浪することになったら
朝を枕に 夜を重ねて
ほてった肉体を横たえ 心で不眠を覚える
荒野に眠る旋律
遠い雷鳴や爆音
偉大な音楽にかくされた不協和音

言葉もなく
名前の本当の意味を知るかもしれない
めまぐるしい夢の中で
誰か！ と叫んだなら
すでにあなたは家の中だ
不思議ななつかしい風景陰
いっせいに立ち去り
二度と帰らない
あやと

そのとき私はこの一篇の詩
あなたがかつて遊んだ深い森の寂しい湖
その水底で ひっそりと泥にかく
黙っていても
あなたの中に はっきりと到達する
時を刻むことのない太陽

ノット・ア・ライン

木糸ゆさ

はるのあめ ふかく ふかく きいろい
 いぬごや 彼女はふと つぶやいた
 はるのあめ もえしだく みずたまり きのう そんなにしていたものが
 脳のすきまを かいくぐる ねえ ルーシーつてば こんなひでも そらのうえ
 に ・ いるの やつぱり はるのあめ どこまで
 お いかけてくるつもり かびんなんてもっ
 てないから、あたし！・・・あ
 こがれるのは それじゃ あ なに
 はるのあめ みあげた 服薬ちゅうのそら
 むかいのうちの ねこ しなやか しなやか
 なうしろすがたの描線を なぞつ て（*手を出してはいけない） はるのあめ
 てがみたち が にじみそめ
 た にびいろを おとしゆく おと ・ おと ・ ああ ひとり ひとり だ
 彼はつぶやいた はるのあめ

きいと ゆさ

1988年生
山梨県出身
早稲田大学文学部在学

もえしだき もえしだき イヤホンのでんきがとけだす せつな すこぶるぬれ た おむか
 いのねこ やめて ・ やめて（ふりむ く・・・） はるのあめ
 他者 が からだをすりぬける 自己 ふか く ふか く うすべにいろのやねのうえ
 すべる ためいき ああわたし もうあしもとが なくなってもいいかしら
 やつぱり はるのあめ ひたひた シャワーの温度をかえて にゅうはくしよくのこやのなか
 なきながら むじゃきにまってる 多大なほく かびんなんてもってない
 から
 やめて、

ひとつ なみうつ しつぽのさき くびのすずを ならして
 「 「 ことば

はるのあめ

ひたり ひたりし きづかない じぶんがじぶんをおいていく ひ

受賞の言葉

木糸ゆさ

言葉と向き合うこと は、私にとって 自分の中の核のようなもの と向き合うことであり、とても勇気のいることかつ労力を要するものである。

できれば打ち遣っておきたいものである。が、しかし、ある瞬間に「書かなければ！」と思ってしまうのだ。それはおそらく、結局、私にとっての表現手段は言葉しか存在しないからなのだろう、良くも悪くも。

そんな厄介な間柄に comma を切ってくれたような思いがけない受賞でした。ありがとうございます。

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

人間鳥コンテスト

福田ゆかり

鳥人間コンテストの前日
人間鳥コンテストが行われた

人間が鳥のようにどれだけ飛べるかを競うのに対し
鳥が人間のようにとれだけ歩けるかを競う

にわとりは朝が待ち遠しくて失格

カラスは途中のゴミ袋に気を取られたので失格

鳩はシャボン玉を探しまわって失格

ふくろうは居眠りをはじめて失格

フラミンゴはここにいたいと言って失格

クジャクはとなりのすずめを驚かせて失格
したがってすずめも失格

必然的に残った

オウムが3位

朱鷺が2位

ダチョウが1位になった

表彰台にならなくても

3匹はなんとなくそわそわしている

翌日の鳥人間コンテストで

人間が涙を流す
3位と2位の

2位と1位の

1位とその上の

段差をも

鳥はみんな一瞬にして
とびこえていった

半紙

泣いてしなしな

怒ってギザギザ

会いたくてひらひら

かなわなくてびりびり

0.001kgのわたしの隣に
したたかな文鎮

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞



ふくだ ゆかり

1985年、大阪府生まれ。

京都教育大学情報音楽専攻卒業。

書店員として働きながら、詩・音楽・雑貨などを創作し
人生を模索している。

<http://yaplog.jp/cocoro-asobi/>

受賞の言葉

福田ゆかり

この度は、優秀賞に選んでいただき本当にありがとうございます。この受賞をきっかけに、もっと詩をかきたい、もっといろいろなものを見つめて生きたいと思いました。わたしは詩という形態で、「人間」とそれを守ってくれている「もの」について世界を広げていきたいと思っています。

「鉄火巻リズム」の登場物は、鉄火巻、それを食べる人間、そしてカマキリです。この作品を書くにあたり、まず題名にカマキリを登場させよう、と決め、そこから「鉄火巻リズム」という言葉がうまれました。詩の内容には何の関係もないカマキリですが、彼なしでこの作品はできませんでした。このような隠れた存在がわたしは好きです。

「人間鳥コンテスト」は、「段差」をキーワードにかいた作品です。とにかく鳥をたくさん登場させようと思いい、こんなコンテストがあればおもしろいなと思っ
て書きました。この詩をかきながら、わたしの前世は鳥だったのではないか、とほんやり思いました。

「半紙」は、最後に「カナブン」を登場させようと思
いました。それが「したたかな文鎮」です。半紙のよ
うなわたし、文鎮のようなあの人、そしてその上を
とぶカナブンを想像すると世界は滑稽です。

選んでいただいた三編には、たくさんの「もの」を
登場させることができました。わたしとともにその「も
の」たちも賞されたようで、わたしはたくさんの仲間
と喜んでいる気持ちです。

母が舞う

第5回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

江口久路



えぐち ひさみち

10代の終わり頃から「中央文学」に詩を発表。
その後、小説に移行。途中、約15年のブランクを経て、
2004年から活動再開。
小説「鬼の手」で第四回銀華文学賞奨励賞受賞。
劇場勤務。52歳。

夜中に目を覚ますと
母が幽霊になって座っていた
母は集合したガス体だが
霧の奥深に
太古の沼をひそませていた
次第に可視化された母の実体は
真赤な長襦袢をけだるく羽織り
裾を血のように引きずると
乳房と腹と性器をどろりと曝け出し
全身を中空に捧げ苛み
左足を軸にくるくる舞い始めた
妊娠した母の腹は皮が透け
危うい瘰癧で
破裂するまで膨張する
紫に浮き立つ血管が不規則に脈打ち
宇宙創生の羊水が渦を巻く
腹は危うい瘰癧を見せ
破裂するまで膨張し続ける
小さな裸の人形を
大切に母は胸に抱き
しかしそれは人形ではなく

干からびた赤ん坊の木乃伊だ

死んで産まれた「私」というものの木乃伊
あるいは木乃伊である私そのもの

微笑する母
目には光なく白く濁り
全ての世界を拒絶し受胎する

私の木乃伊を右手にわしづかみ
飛翔の体勢に両腕を広げてそばだち
華奢な顎を突き出して小刻みに頭ふるわせながら
左足を軸に永遠の回転を続ける

母は何度も私を孕み
私に連なる私を産み落とそうと

くるくるくるくる
くるくるくるくる

羊水に眠る私ごと
死んだ私をかき抱き

夜ごと夜ごと
ただひたすらに

引き攀れた産みの果てなき瞬きを舞い続ける

受賞の言葉

江口久路

じくじくと膿んだ皮膚に指の腹をそっと押し当て鼓動を確かめる。次第に指先に力を込め、時に小さく爪を立てる。破壊された細胞を爪で掻き出し、取り返しのつかない自身の行く末を予感する。

私にとって、詩作とは、私というものの精神の過程をたどり、そこを何度も巡りながら、中にひそむ言語的欠片を拾い集めて行く一連の作業です。しかし、時として思いがけず私自身を危険な状況におとし入れる恐れもあるため、久しくおこなってはきませんでした。「五条秀敏」という名で詩を発表し始めたのは、まだ二十歳に満たない頃だったと思います。それから数年は詩を書いていたはずですが、あまりに古い話で、いただいた掲載誌もいつの間にか手元から消え去っていました。

やはり当時も、不健康な、死をイメージさせる内容の詩ばかりを書いていたという記憶があります。長い年月を隔てても、自分の立ち位置が変わることにはなかつたようです。

この度、このような素晴らしい賞をお与えいただいた機会に、また少し、詩のほうも書いてみようかという気持ちになっています。

小説とのバランスを保ちながら、結晶化する言葉をとらえ、それらをうまくつなぎとめることができたなら、これからも詩作を続けて行きたいと思っています。この度は本当にありがとうございます。